

## 書評

# 『ビジュアル調査法と社会学的想像力』 ——社会風景をありありと描写する』

● C. ノウルズ・P. スウィートマン 編

(後藤範章監訳, ミネルヴァ書房, 2012年, A5判, 336頁, 3,570円)

● 岡原 正幸

(慶應義塾大学文学部教授)



「ビジュアル社会科学は写真術と同じくらい古くからあるのだが、私たちはまだ始まったばかりのところにいるのであり、今後すべき仕事は多々ある」という H.S. ベッカーの言葉で締められる本書は、まぎれもなく、日本語で読める最初のビジュアル社会学のテキストである。

18人にも及ぶこの論集への寄稿者、その中にはベッカーの他にも、映像社会学の大物、D. ハーパーなども含まれる。自己とアイデンティティ、家庭、コミュニティ、都市風景、社会変動といった領域、つまり個人の親密性から構造的な変動というまさに社会的な問題関心の範囲で、それぞれがビジュアル調査法をいかに用いて社会的な実践を行ってきたのかを、詳細かつ具体的に明らかにしてくれている。

読者が、それらの章を通じて、まず目にするのは、ビジュアル資料というものが単なる記録でもなければ、単なるイラストレーションでもなく、その用いられ方が実に多種多様だということだろう。写真やビデオなどの映像資料は、容易に想像できると思うが、まずは、フィールドの被写体を調査者が撮って記録を残すもの、あるいは写真家や報道の手によるもの、さらには調査協力者が自ら撮影した資料だったりする。だがそれだけではない。

イギリス社会学会のビジュアル社会学部門のホームページでは、ビジュアル社会学の3つのアプローチとして、①映像記録機器を用いたデータの収集、②映像文化の研究、③映像を用いたコミュニケーション、が挙げられている。本書は万遍なくこの3つの分野を行き来する。ただ私の関心からすれば、ビジュアル社会学の醍醐味はフィールドノートの補完物とか観察記録にあるのではなく、第三の分野「映像作品としての社会学」にある。

「社会風景をありありと描写する」とは、確定

的な事実を一義的に明らかにすることでも実証することでもない。むしろそれは、その風景や人の意味世界を深く広く伝え、さらなる豊かな解釈や対話に人を誘う試みではないだろうか。いわばアート作品としての社会学があり得るということでもある。その意味では本書をビジュアル社会学という枠にとどまらず、アートを用いて実践される研究活動 (Arts Based Research) の実例集としても読むことができる。思えば、監訳者の後藤範章が実践する「集会的写真観察法」はまさにアートによる質的研究そのものである。

限られた字数のため、駆け足で付け加える。まずは、デジタル機器の機能、利便性、価格について。原著が公刊された2004年といえば、ビデオカメラはテープが主流、標準価格帯は20万円、デジタルカメラの機能や価格も今には及ばず、記録メディアも原始的、雲泥の差である。編集ソフトや携帯電話の進化もある。今や、調査者も調査協力者も、教員も学生も誰もがカメラを常備して、瞬時にネット上 (SNS など) にアップできる時代である。映像環境のこの劇的な変化はもっと真剣に受けとめ活用されるべきだ。

訳出についても一言。私が驚いたのは、原語のカタカナルビが随所に施されているということ。新しい分野の紹介にあっては、読者が原著単語を勘案しながら読めるというのは大事だ。このような細やかな配慮を進めた訳者の皆さんには敬意を表したい。

最後に、またもやベッカーである。社会的な意識 (想像力) をもって写真を撮るのが、最も単純なビジュアル社会学の方法だと、彼は言ったそう。倫理的問題などがあるにせよ、まずはとりあえず、本書を小脇に、自分たちの周りの世界にレンズを向けて、そこから対話を始めてみようではないか。

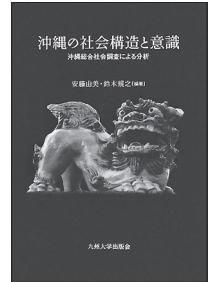
『沖繩の社会構造と意識  
——沖繩総合社会調査による分析』

●安藤由美・鈴木規之 編著

(九州大学出版会, 2012年, A5判, 336頁, 6,300円)

●田辺 俊介

(早稲田大学文学学術院准教授)



社会に関する様々な事柄を広く尋ねる総合社会調査 (General Social Survey) は、1972年にアメリカで始まり、その後ドイツやイギリスをはじめ多くの国々で実施されている。日本でも2000年より最新の2012年まで、日本版総合社会調査 (JGSS) が続いてきている。本書は、それら総合社会調査を模範として2006年に行われた「沖繩総合社会調査」の記録であり、同時にその成果を紹介する一書である。

その全12章にわたる論考は、調査の背景や概要をまとめた第1章と、全体総括を行う第12章以外に、社会学的関心からみた家族意識、開発・発展への意識、対外国人意識、沖繩イメージについての4章、社会福祉学から論じた地域生活と社会参加、地域組織参加や地域帰属意識、健康・精神障がい者への意識、子育て支援状況に対する意識、車社会の現状とその認識に関する5つの章、さらにマスコミ学による政治傾向とメディア接触の1章と、学際的に構成されている。それら各章では、可能な限り類似の全国調査と比較しながら沖繩総合社会調査の集計結果を提示したうえで、既存研究に結びつけながら沖繩の独自事情を明快に説明している。そのため、沖繩の人々の社会意識を広く知りたい人はもちろん、取り上げられたテーマに関する沖繩研究を行う場合にまずは一読すべき文献となるであろう。

ただデータ分析については、分布の提示の他には、多くの章で項目間のクロス集計か、属性 (男女別・世代別など) のクロス集計に限られていた。そのため一部の章では、提示された分析結果だけでは論文の掲げた課題に答えきれていない、と思われる部分があった。しかしその点は、SSJ データアーカイブからデータが公開されているため、より詳細な検討を求める研究者は、自らデータを入手し、二次分析を行うことが可能である。その

意味で本書の価値は、公開データと連動することでさらに増すものであろう。

昨今、国際比較による調査・研究が盛んである。だからこそ、国際比較の単位となる「国」の内部を一枚岩的な存在とみなしてよいか、その根拠について国内の地域間比較を通じて考察する必要がある。その点、「単一民族神話」が根強い日本において沖繩は「本土とは異なった社会構造と歴史的・文化的背景」(本書1頁冒頭)がある、とみなされる地域であり、「国内」の同一性を批判的に検討するには最適な地域である。そして本書で提示される結果からは、「日本」という単一性に還元できる部分と、沖繩の独自性・地域性として多様性を見出す部分が、ともにあることが伺える。このような発想で企画される「地域版総合社会調査」が様々な地域で実施され、比較分析が行われていくことで、様々な社会科学的課題における適切な比較の単位が明らかとなるであろう。そのような意味でも、沖繩総合社会調査の学術的意義は非常に高い。

また、このような総合社会調査は継続性も重要である。沖繩総合社会調査が模範として挙げた種々の総合社会調査は、その「継続性」を1つの柱としている。横軸として本書で行われたような全国との地域間比較を、そして今後縦軸に継続調査による時点間比較を行うことで、「沖繩」の普遍性と特殊性がより明確になるだろう。そのため本書第12章でも2006年調査から10年後の2016年における第2回調査の可能性が述べられているが、一社会学者として、ぜひその実現を祈念したい。